紅蓮天照烈士之神楽

甲田　和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅蓮天照烈士之神楽

【Ｎコード】
Ｎ０５４７ＢＡ

【作者名】
甲田　和

【あらすじ】
三月までめったに更新できないです。超不定期です。
本作品は和風？な世界観を目指す上で日本史、世界史等に共通する単語が含まれておりますが、史実と本作品での意味合いや使われ方に差異が生じる場合があります。ご了承下さい。
また和風？となっているのは文化水準が和風とは言い難く、正式には和風現代混合な世界観です。詳しくは小説内にて明らかにしていきます。

幕府が成立して二百年、誰もが受け入れた平穏や生活が掻き消え始めたのは五十余年前のことであった。
世は乱世――山賊、海賊、辻斬り、更には妖魔が横行跋扈する時代。町村外での殺しは法では裁けない。
力無き者は何も守れず奪われ殺される。大名の悪政に苦しみ飢え死ぬ者も居れば、賢き大名による治世で平穏に暮らす者も居る。
小さな起爆剤でも投げ込めば、領間での戦なぞ必然に生じ、勝利領は敗北領の金品、女といった戦利品を持ち帰り宴を開く。
皆全て、海外諸国との外交により外来の技術を貪欲に取り入れた幕府の意向が原因である。
亜米利加（アメリカ）、英吉利（イギリス）、独逸（ドイツ）、露西亜（ロシア）、仏蘭西（フランス）、西班牙（スペイン）、中国――列強国に連なりし極東の国。形式上、幕府が治めし“神の住まう国”

七十三ヶ領に分かたれたこの国の名は“神州”――“神州高天原大八島国”
力が全てのこの国で、真に恐ろしきは人か、妖魔か、はたまた別の何かか。
いと雅と見られるか、醜悪と見られるか、烈士達の舞に委ねられることとなろう。
これより、鮮烈なる神楽が幕を開ける。
饗宴の準備はよろしいか――。

絶一唯我（前書き）

読もうと思ってくださった読者様、はじめまして。この小説を書かせてもらいます“すたぴ。”です。最後の“。”も重要です。すみません関係ないですね。

さて、このすたぴ。の初作品は年齢制限はしておりません。

理由としては

・現在、直接的な性描写や性交描写は予定していない。

・そもそも色々明確に書き続けるのが恥ずかしい。

です。自分勝手な理由で申し訳ありません。

ですが、やや残酷な描写は予定に入れております。

その為、警告タグにもチェックを入れてます。

と言っても明確には描写は避けます。（避けれているか怪しいですが）

この後のページが自分にとってはそれなりの残酷描写です。これより軽い時もあれば重い時もありますが、基準として見ていただければ、と思います。

「これは無理」と思った場合はすぐに読むのをお止めください。

また、先程直接的な性描写は予定していない、と書きましたが、世間一般的に見て卑猥な単語を喋らせる予定はあります。まぁ、「この巨乳！」とかそんな中学生みたいなのでおそらく大丈夫かと勝手に判断させていただきます。

それでは、後書きにてお会いできることを楽しみにしています。

絶一唯我

あぁ、また死んだぞ。どうして貴様等優等種はこんなにも脆いのか。疑問に思うだけ無駄であると先刻塵の頭を踏み潰した時に悟った筈だが、こればかりは思わざるを得ない。

死骸が邪魔だな。この俺に邪魔と思わせる存在なぞいらん。故に既に息絶え、床に伏している塵の身体の見やる。そら、あっという間に潰れたぞ。潰れた塵の姿が視認できんな。大方、埃にでもなったか。実に愉快。

愚かなり。今の一連の出来事を見てまだ俺に刃を向ける塵どもがいるか。数はざっくばらんに見て四十はおろう。あぁぁ、見てしまった。また潰れてしまった。血が床を満たしていく。何と素晴らしき光景かな。しかし、そろそろ“首飛ばし”を再開せねば。やはり定期的に塵の皮を、肉を、骨を断たねば欲求不満に陥る。

が、もういない。何だそれは。あれだけやかましかった喧騒はどこにやったのだ塵。本心、塵など切りたくないが、この“殺戮欲求”は仕方がない。しばしの我慢である。

一向に気配がしないので、塵探しへと繰り出すこととなった。途中、“首飛ばし”の際に自らの胴体と永遠の別れを告げた気持ち悪い頭を見つけた。恐怖で顔が歪んでおり、非常に醜かったので踏み潰した。優等種と言えども、醜いものは醜い。当然、噴き出た血も醜く、質も最悪であった。

最悪と言えば以前、男という塵と女という塵が性交している時に両方の首を跳ね飛ばしてやったことがあった。あれには苛立ちを隠すことなぞ到底出来はしない。繋がったまま転がる二つの肉体から間

歇泉の如く噴き出た血は、今のとは比較にすらならなかった。

そも、何故貴様等優等種が、塵風情が存在する？　この“殺戮欲求”を満たす為に、俺に殺される為に生きているのか？　否。断じて否。真実は、究極的に“塵は寄り集まって塵同士馴れ合いたい”から存在しているのだろう。故に絡み、関係を持つ。成程全く理解し難い。優等種が優等種を見て、話し、関わるのは構わん。殺し合うのも、愛し合うのも結構。想像するだけで三回は死にそうだが。

だが、何故俺を見た？　何故俺に触れ、関わろうとした？　俺がそんなことを望んだとでも？　優等種らしい、沸騰した頭を持っているな。妄想癖も甚だしい。俺は俺から始まり俺だけで終わっている劣等種なのだから、誰もいない、何も無い、俺だけで満ちた場所にいたい。その為なら死んでもいい。なのに貴様等、俺に関わったな。

その愚行のせいで俺は塵どもを絶滅せねばなくなったのだ。

故に、塵は掃除せねばなるまいて。貴様等俺を見下しているだろうが。そうとも、俺は唯一無二の劣等種なり。故に俺は貴様等を妬んで絶滅させたくなってしまう。この妬みは決して消えぬ。俺は悪くない。俺をそうさせた塵どもが悪いのだ。俺以外、万象一切消えて無くなれ。

あぁ、いたぞ。そこの棚に隠れているな。見たくもないので棚ごと割断してやろうとでも思ったが、その棚というのがまた小さい。子供・・・俺と同じ背丈かそれ以下の塵しか入れないであろう。それだけ小さな塵を殺すのは初めてである。故にこの目で見て、この手で殺してやる。劣等種であるこの俺が貴様等優等種に対する最高の賛辞と知れ。

女か。流石は優等種。成長すればこの女は相当な美人になるに違い

ない。結局は塵だが。
俺を見ない。成程気絶しているのか。よくよく見れば両手足が縛られている。幼いながらもこれだけの美しさ、いつ男という塵が欲情し、犯し輪姦すかわからん。そうでなくとも、年を重ねればこの女という塵は男という塵の一物で喘ぎ、淫乱な姿を晒すかもしれん。

あぁぁぁ、この女は俺を見ていない。気に入ったぞ殺してやる。その無垢な顔が誰とも知らぬ男に汚されるなぞ、許さん認めん消え失せろ。この女は俺のモノだ。今決めた。殺してやるから泣いて悦べ。女、貴様はおそらく塵の中で最も劣等(ゆうしゅう)だ。

絶一唯我（後書き）

お会いできて光栄です。どうもです。すたぴ。です。
今の残酷描写に楽勝、耐えれた、気にならなかったという読者様がこの後書きを見てくださっていると思います。
正直、これ以上の残酷な描写はほとんど無いかと思われますので、ギリギリ耐えてくださった読者様も大丈夫かと。（多分）
この紅蓮天照烈士之神楽、自分が中学生（厨二病末期患者認定済）の時に自己満足に書いていた小説のリメイクであり、題名や細かな設定などはそこから引き継いでいて完全なオリジナル・・・と言い切れる自信は余りありませんが、自分自身は、完全なオリジナルと思っています。
少しでも多くの読者様に楽しんでもらえたり、感動してもらえたりできる作品を作っていきたいと、日々精進していますので、どうかよろしくお願いします。
前書き、後書きと長々申し訳ありませんでした。
それでは、どうぞ。

第一章　甘蜜時之風

真昼時、信濃領松代町は活気に賑わっていた。信濃大名“真田幸正”による治世のお陰か、信濃領は諸領に比べて平穏を保っていた。否、現状維持と言うのが妥当だろうか。飢えている者は居ない。逆に、裕福な者も居ない。言うなれば皆平均的な身分であり差別も起こらない。裕福な者、つまりは上流の貴族が居るとすれば、余所の領から移ってきた物好き位であろう。故に平均化されたこの領で、服装が綺麗な者、一際目立つ格好な者は十中八九余所者と認識されてしまう。

「ごちそーさまでしたーっ！」

とある一軒の団子屋にて、溌剌とした声が響き渡る。外に備え付けられた縁台に座っている女性が、声の主だ。その隣には黒長髪の女性が呆れたように言葉を漏らしていた。

「元気が良いのは構わないけれど、もう少し音量を調節してもらえると嬉しいわ」

湯呑みを手に取り、ほんのりと香りがする緑茶を啜る。一般的なものより甘めに作られているであろうこの団子の為に、やや苦めである。が、左程気にはならず、むしろ好感が持てた。

「私にだけならまだしも・・・他の人にも迷惑がかかるのは止めて頂戴」

「ありゃりゃ、つい癖でね」

「癖にも良し悪しがあるとわかったし、幸い外もそれなりに騒がしいから不問としましょう。それよりこの後の行動ですが・・・」

この二人、言わずもがな今朝方に松代町に行き着きた余所者である。この町の風景にそぐわない、今流行りの和風と洋風を足した様な格好である。と、言っても洋風らしいのは靴、茶髪はやや短めの、そして黒髪は逆にやや長めのスカートぐらいだろうか。

「真田に会う？　いや別に私は構わないけどさぁ・・・」

「けど、何？　お腹いっぱいになったからさっさと宿に行って寝たいと言うのかしら？」

ギク、と茶髪を後ろに束ねた女性が漏らす。図星の様で、先程から隣の視線から泳がすように目を背けていた。

「ギク、じゃないわよ。早苗、私達の目的は？」

「え～と、美味しい物食べ歩き旅行？」

無言で立ち上がり、黒髪の女性は勘定を払いに行こうとする。が、慌てて早苗と呼ばれた女性が腕を掴み、阻止せんとした。

「嘘！　今の嘘！　冗談冗談！　信じて姫さん、じゃなかった蓮理ちゃん！　マジマジ私が悪かったです！！」

蓮理と呼ばれた女性が相当性格がキツい人物であるなら、間違いなく早苗を突き放しているだろう。しかし、蓮理は溜め息を吐いて再度、早苗の隣に座った。

「・・・とにかく、城門前までは行ってみましょう。そもそも、相手は大名。会えるかどうかなんて、私達にはわからないことだし」

蓮理はゆっくりと辺りを見渡した。成程、貧富の差が無いというのはやはり武蔵領に近いからか。となればこれから先、この平和そうな雑踏も見えなくなってしまう可能性が高い。事態は思ったよりも深刻、と思ってしまう。

「あの・・・すみません。少しよろしいでしょうか？」

横に立つ人の気配を感じ取り、蓮理と早苗はほぼ同時に顔を上げた。

声を発したのはいかにもな好青年であった。水色、と表現しても良さそうな青髪に、蓮理達と同じような服装（違いは男物というだけ）で屈託の無い微笑みを浮かべている。

が、それよりも蓮理の目を引いたのが男の腰横に差された棒状の物。つまり、鞘に収められた刀剣である。帯刀は不可という法は無い。身分限らず、誰でも持って良い、護身用のあるいは殺害用の武器である。故に、蓮理はこの男を警戒せざるを得なかった。

「何の用だい色男」

早苗が応対する。確かに早苗の言う通り、この青年は顔立ちが整っていた。スッとした鼻は高く、小顔である。

「いやいや、貴女方の美しさに見惚れてつい。僕と同じ気持ちの男性が、きっと今まで何人居たんでしょうね？　・・・と、事実ですが茶番はここまでにしておくとします。どうやら僕は警戒されてるみたいですし」

蓮理は少し、考える。美しい？　確かに早苗はちゃんとしていれば美人にも見える。幼さが残ってはいるが、充分だろう。幼馴染みである私が言うのだから、間違いない。だが私は？　思い返せば、成程私はよく容姿については老若男女問わず大勢の人から必要以上に褒められてきた。とすれば、私の容姿は人並み以上と自惚れても良いかもしれない。しかし、男に言い寄られたことは一度も無い。早苗の方はもしかしたらあるかもしれないが、どうにも私は男運と言うものが無いらしい。私の性格が悪いのか、何か別の要因か、はっきりさせたくてもできないのが少し、もどかしい。

「っと、申し遅れました。僕は雨宮思斗（あまみや しと）。貴女方を襲っちゃおうと企んでなんかいない、しがない流れ者、浪人です」

思斗と名乗った青年はもう一度、笑顔で蓮理と早苗の両者を見る。

「とある人を探していましてね。あぁ、時間は取らせませんよ」

そう言って思斗は懐から写真を取り出した。小太りして、髭を蓄えた中年の男であった。

「どこかで見た・・とか、ありませんかね？」

蓮理は記憶を掘り起こすが、このような人物は見たことが無い。首を横に振る。早苗は元々記憶力というものが人並みよりも足りていない節があるので、長い間呻きながら写真を見つめていたが、結局は蓮理と同じ返答になってしまった。

「お役に立てなくて、ごめんなさい」

頭を下げる蓮理と、釣られた早苗を見て、写真を元の懐に戻していた思斗が微笑む。

「いえ、もしかしたら・・・と思って訪ねただけで、駄目で元々ですから。貴女方が頭を下げるのは筋違いです。本来なら僕が下げる立場なんですよ・・・と、すみません。そろそろ待ち合わせがあるので、僕はこれにて」

二人に背を向けた思斗はそのまま歩きだそうとしたが、そうだ、と呟いて振り向く。

「今度またお会いしましょう。会えた暁には連れと共にお礼でもしますよ。その時、お名前でも教えて下さい。見目麗しいお嬢さん方」

遊び人しか言いそうにない台詞を残し、思斗は雑踏の中へと紛れ、姿を消してしまった。いきなりの再会の約束に、二人は呆気に取られ、しばらく固まったままとなってしまった。

やがて、蓮理が沈黙を破る。

「男の人って、皆ああいう感じなの？」

「や、あれはちょいと特別。っていうか、私も初めて見たし」

第一章　甘蜜時之風（後書き）

閲覧ありがとうございます。
誤字、脱字があれば報告お願いします。
また、よろしければ感想なども頂きたいです。
尚、今後御礼の言葉は省略させて頂き、この後書きは本文に出てきた用語の解説とさせていただきます。何分史実と異なっている意味もありますので、どうかご容赦下さい。

＊領
現実で言う、都道府県に相当するもの。
七十三ヶ領に分かれている。

＊大名
史実の江戸時代では大名は藩ごとに設置されていたが本作品では領の治世者として設置されており、七十三名存在する。（史実では約三百藩あったとされている）
一大名につき一城、設けられている。

＊信濃
北陸甲信に位置し、現実の長野県に相当する。

＊松代町
信濃領の大名所在町（大名が居る町のこと）

＊貴族
幕府に規定数の年貢を納めた者に与えられる称号。規定数より二倍の年貢を納められる程の保有量を有していると、強制的に貴族にさせられる。

＊武蔵

現実で言う、東京と埼玉に相当する。幕府が置かれており、国で一番豊かとされている領。この領のみ、幕府の城と大名の城が存在する。幕府は全領の総括、大名が武蔵を治める形を取っている。

＊蓮理や早苗、思斗の服装

国独自の文化である和風着物を基調とした、流行りの格好。人様々であるが、着物、というイメージから崩れないようにすれば大体はそれっぽくなる。

＊写真

外来の技術により、人を写し取ることが可能となった。

第二章　雅人悪誤

団子屋で一風変わった男が去った後、二人は城門前まで来ていた。大名の真田幸正に会う為である。大名に謁見を希望するなら厳密な身体検査の上、監視も付いてようやく謁見できる。逆を言えばそれさえこなせば民間人であろうと大名と話すことができるのである。しかし

「真田様は現在信濃を離れており、不在です」

と、門番から門前払いを喰らってしまい、手続きすら行えなかった。治めるべき大名が不在、自らの領内から離れるなどというのは、基本無いに等しい。あるとすれば、敵対している領への攻撃か、幕府からの収集命令。この町に来てから行き交う人々や団子屋で真田について聞いてみたが、真田の評判は良好でありしかも不在等という言葉は一言も言っていなかった。大名が領を離れる時は必ず民にその旨を伝えなければならない。人々が総出で嘘を付いているのか、大名が会いたくない、もしくは会えない状況であり、門番が嘘を付いているのか。蓮理は様々な可能性を思考してみたが、情報が足りな過ぎて決定打に欠けるどころかその域まで達することもできない。

「どうすんのさ。信濃、後回しにして先に甲斐行っちゃう？」

「いえ。そうなるとまたここに戻って来なくてはいけなくなる。余り往復するのは好ましくないわ」

早苗の提案に蓮理は首を横に振る。

「真田公が帰ってくるまで、信濃に滞在しましょう。でも一週間が

限度ね。それ以上は待てない。最悪、先に甲斐へ向かうことになるわね・・・」

「やたっ！　よぉ～し、次は蕎麦屋へ行こう蓮理ちゃん！」

嬉しそうに走り出す早苗に離されない程度で追いながら、蓮理は再度思考を開始する。早苗と自分の食費、宿代、その他・・・どれだけ節約すれば良いか頭の中で計算を繰り返していた。まず行うべきは早苗への叱責だろう。本来の目的を完全に忘れている愚か者には体罰の処置も考慮に入れなければ。

「あいたっ！」

蓮理が追いかけていると、前方の早苗が急に尻餅を付いた。どうやら橋の上で誰かにぶつかったらしい。本日何度目になるかわからない溜め息を吐き、蓮理は早苗の元へと辿り着いた。

「何やってるの。すみません。連れがご迷惑をお掛けしました。早苗も早く立って」

早苗の腕を掴み、引き起こす。女性にしては長身である早苗も、こうなってしまえば子供を見ている感じに陥る。

「ご、ごめんなさい～」

ぶつかった人物は小柄の青年。蓮理と同じくらい・・・少なくとも早苗よりは背丈が小さい。いかにも気弱そうな雰囲気の持ち主であった。大丈夫、と言いながら左右上下、しきりに辺りを見渡している。

「あの・・・もしかしてぶつかった際に落し物でも？」

青年の行動を見て、蓮理は青年が何かを探しているのかと思い、尋ねた。もし橋の下の川に落ちていれば、間違いなく弁償だろう。

「い、いえ。何でもないんです。こっちもぼうっとしてたんで、すみませんでしたっ・・・そ、それでは！」

「え、あ、ちょっと」

早苗が呼び止めるも、青年は雑踏の中を走り抜け、何処に居るのかわからなくなってしまった。

「・・・何だったのかしら」

「んー・・・？」

二人で首を傾げる。が、いくら傾げても答えは出なかった。

橋の真ん中に突っ立てるのもどうかと思い、一先ず二人は宿屋へと向かうことにした。早苗が蕎麦屋とごねていたが、蓮理は一刀両断し解決に至った訳である。

「ちょいと、そこの嬢さん二人組」

橋を渡り切ると、横から声が飛んできた。立ち止まり、左方にいるであろう声の主を視認する。

「あ・・・」

思わず声を洩らしてしまった。それほどまでに綺麗で、背も高かった。尋ねて来たのは女性。赤い長髪。それは鮮血のように陽に照り輝いているようにも見えた。髪型は蓮理より短いがそれでも腰辺りまである上に、体の前にも胸まで垂らして毛先はやや跳ねている。蓮理のように艶やかな直線ではなく、全体的に少し波打っていた。更に、黒い紐で一部分の髪を後頭部に高く束ねて尻尾のように垂らしている。その長さは腰まではなく、首辺りが妥当であろう。やや変わった髪型であるが、同じ女性として蓮理は羨ましい感情を持ってしまった。と、いうのも蓮理は自身の髪型に自信が無い。容姿と同じくらいに髪型も褒められてきたが、どうもそれはお世辞にしか聞こえない。蓮理の髪型は黒髪長髪。少しも髪は傷んでおらず、質に関して見れば蓮理に軍配が上がる。しかし、自信を無くしている要因はそこではない。後ろ髪がどう頑張っても左右斜めに跳ね上がり、耳・・・特に猫耳っぽく形作られてしまうのだ。仕方なくこの髪型を貫いてはいるが、傍から見れば変な髪と思われるに違いない。早苗にも昔相談したことがあるが、『猫みたいで可愛い』と全面的に肯定されてしまった。

「何、少し聞きたくてね。嬢さん方・・・そちらの茶髪かな？　ぶつかった男、知り合いかい？」

声までも透き通る位綺麗であり、口調はやや男らしいが早苗という前例がいる為全然気にはならない。身体の線も細く、格好は女物の着物で少し地味な緑色一色であるが、見事に着こなしている。

「え？　いや別に？　ってか、私達今日ここに来たばっかでさ」

早苗も少し呆気に取られていたが、我に返り受け答えする。

「ふぅん・・・ま、見失ったしもういいか。これ以上は無駄骨だろうし」

何やら呟いていたが、蓮理と早苗には聞き取ることができなかった。雑踏が煩かったのか、彼女に見惚れて耳に入らなかったのか、単に彼女の声が小さかったからなのかはわからない。

「ありがとう。ここは良い所だよ。いや自分も先日来たばかりだけれど・・・それじゃ」

ゆっくりと後ろを向き、赤髪の人物は人気の無い、細い路地へと入っていった。二人は終始呑まれたまま見送るしかできなかった。

第二章　雅人悪誤（後書き）

＊甲斐
現実で言う、山梨県。

第三章　白老闊歩夜半時

昼間は賑わっていた大通りも真夜中となれば静まり返り、主役は人ではなく猫等の夜行性生物となる。が、それを無視するかのように人影が二つ・・・月明かりから隠れるように物影に隠れた。

「さて、と。どうでした？」

「いや、収穫無し。強いて言うなら、身の程知らずの馬鹿野郎共が言い寄って来た位かね」

「へぇ・・・僕は時たま女性が寄って来る程度でしたが。ちょっと羨ましいですね。代わって下さいよ」

「そりゃこっちの台詞だよ。死んじまえ色男。春本の主人公みてぇな面しやがって」

「それはとんでもない言い掛かりですね。とまぁ、面白おかしい談話はここまでにして、脱線した話を元に戻しましょう。真面目な、お仕事の話です」

「脱線させた本人が何言ってんだか」

「いちいち文句言わないで下さいよ。真田公のことです」

「とりあえず、尾行しながら適当に訊いてみたんだがよ。真田公は領民に不在って伝えてねぇな」

「僕が門番に同じことを言われてかれこれ三日・・・今日も夕刻に

行ってみましたが未だ不在でしたよ。領民は大名に謁見したりしないんでしょうか？」

「謁見が自由になったのは、そもそも悪政や生活苦難を訴えたい領民の為に直々に張本人に言える様にと願った、結構昔の幕府の将軍が作った規則だからな。名前忘れたが」

「感動的な話ですね。それで、僕の疑問には答えてくれますか？」

「答えただろ。今の所、信濃は貧富の差が無い。加えて奇跡的にも欲深な奴はいない。つまり、ここの領民は現状に満足してんだよ。そうなりゃ謁見なんざ糞並みに必要ねぇ。何だ？『こんにちは大名様。今日は良い天気ですね』って挨拶する為に馬鹿みてぇに厳しい身体検査受けて、糞真面目な監視付けられんのか？　阿呆か。そこまで大名も暇じゃねぇよ」

「成程。ご高説ありがとうございます」

「何がご高説だよ。わかってて訊いてんじゃねぇ」

「僕は性格が悪いですから。それより、口調。戻ってますよ」

「・・・気ぃ抜いただけだろ」

「駄目です。やっぱり女であるならお淑やかが一番ですよ。そうそう、今日凄く美しい女性にやや男勝りな、これまた美人な女性についい声を掛けてしまいましてね。あの黒髪美人、自尊心がめちゃくちゃ高そうでしたが気品漂いまくってましたよ。性格は頑固っぽかったですが、あれこそお淑やかの極みでしょう。もう一人の方はやや天然が入ってそうで、長身で素晴らしかったですよ。茶髪も良いも

のです」

「あぁ、そう。お前の女考察はもうどうでもいいわ」

「あれ？　妬きました？　それとも興味無いですか？　黒髪の方、好みの釣り目でしたよ？　百合展開突入しませんか？」

「妬くか！　そもそも誰がお前に俺の好みなんざ言った！？　んでもって何が百合だコラァァァ！！」

「時間考えて発言しましょう。夜ですよ。寝てますよ。しかも一人称。いくらなんでも俺、は無いでしょう。明日からはお淑やかを目指して下さい。そうだ、明日その二人探してお会いなさりますか？　少しは学べるかもしれません」

「っざけんなよ誰が会うか。テメェが会いたいだけだろうが」

「あ、バレました？　まぁ、目当てはそれですが、忠告しておこうかと」

「忠告？」

「そもそも話し掛けたのはそれが原因なんですけどね。彼女達が真田公に会うだのと仰ってたのを偶然聞いてしまいまして」

「・・・成程、邪魔だなそりゃ」

「どこかの誰かさんみたいに真田公について領民に訊き回られれば、僕達が訊く時に不信感を与えかねませんので、その場合は邪魔になるでしょうが、問題はそこじゃありませんよ」

「言い返したいが論破されるかちゃぶ台返しされるかの二択になるから、言わないでおく。で？　問題って何だよ」

「こちらとしても、それがありがたいです。先程言いましたよね・・・ええと、身の程知らずの馬鹿野郎が言い寄って来た、と」

「ああ、確か『嗅ぎ回る鼠めが』とか言ってたな。何かしら真田公不在に関係してるんだろうな。捕まえずに捨て置いたが」

「やはり。ええ間違いなく真田公不在に関わってます。しかし、何故僕は狙われなかったのでしょう」

「・・・お前は遠回しに当たり、俺は直接当たった。つまり」

「つまり、真田公についてのみ訊いている人物が狙われる。・・・まぁ、これは妄想に近い、憶測ですがね。偶々今日は僕の所へ来なかっただけかもしれません。しかし、忠告はしておいて損は無いでしょう。このご時世、何があったって不思議じゃない。それに・・・」

「それに？」

「彼女達の服装、どうもきな臭い。慣れてないというか、普段着を着ている感じじゃない。どう見ても僕達と同じ流れ者ですが、僕が絶賛する程に綺麗です。綺麗過ぎるんです。髪も、服も、肌も。貴族の御令嬢だとしても、何故わざわざあのような格好なのか・・・気になります」

「そりゃ俺も気になるがね・・・お得意の考察の続きは宿だ。潰す

ぞ」

「・・・見られてますね。忍の類か、一人。何にせよ僕達どちらが囮役になるかはあちらの方に任命してもらうとしますか」

「俺とお前、どっちに追って来ても恨みっこ無しだからな」

「あちらの方が賢ければ、十中八九僕の所へ来るでしょう。早めに仕留めて下さいよ」

「そりゃお前がどれだけ頑張るか、だろ」

「頑張りたくないから、お願いしているんですよ」

二人は別の方向へと飛び、散開した。

翌朝、小路である裏路地の行き止まりから、多量の血痕が発見された。

夜中に怒声の後、しばらくして小さくだが金属音が鳴り止まなかったという情報が寄せられている。

第三章　白老闊歩夜半時（後書き）

＊春本

十八歳未満は見ちゃ駄目！な本のこと。

第四章　左見右見果賊物騒動

巳二つ時、宿を出た蓮理と早苗は再度、城門前まで来ていた。しかし、返答は昨日と同じ。違う点を述べるとすれば、発見された血痕のことで注意を呼び掛けられた位である。

「今日も駄目ね。真田公、何処に行かれたのかしら・・・？」

「う～ん。別の町村に視察？」

顔を顰(しか)めながら考え込む蓮理を見て、早苗は首を傾げて根拠も無い答えを出す。

「それでも、ちゃんと大名所在町の領民には伝えなくてはならないわ。でもそれをしていないとなれば・・・まさか責務を放棄している？　いや忘れているだけもあり得る・・・いいえ、それこそあり得ない。真田公はそういう人ではなかったわ。でも万が一、という可能性も・・・」

頭を抱え、更に思考速度上げていく。蓮理は筋金入りの頑固者であり、一度何かを始めれば納得が行くまで、少なくとも自分からは決して妥協せず止めようとしない。故に、泥沼に嵌り易い性質(たち)である。そのことを、蓮理の幼馴染みである早苗は重々承知していた。

「・・・蓮理ちゃん蓮理ちゃん。そんな難しい顔してたら、皺(しわ)が増えちゃうって」

「えっ？　・・・そんなにしてた？　私」

「うん。もうすっごいヤッバい位に」

早苗は自分の顔を弄り、蓮理に見せる。それを見た蓮理は思わず吹き出してしまい、直ぐ様緩んだ口元を右手で押さえる。

「なっ・・・確かに考えに没頭してたのは認めるわ。けど・・・くっ。けど！　私そんな顔はしてないわよ！」

既に早苗は顔を元に戻していたが、蓮理は思い出し笑いを繰り返してしまう。お陰で上手く喋ることができない。

「そーそー、じゃんじゃん笑って笑って。笑いながら気楽に行こうよ。こーんなさ、初めて来た土地なんだしいくら考えたってわかんないって。真田公だって、何度も会ったこと無いんしょ？　そんなんじゃその人が何を考えてんのか、とか行動読める訳ないじゃん」

物事にも、引き際というものがあるのだ。蓮理はそれを見極める能力がとりわけ欠けている。文武両道才色兼備と謳われている幼馴染みの短所（こせい）の一つであり、それを改善・・・否、教えてやる役目は自分であると、早苗は誰よりも理解していた。

「・・・そうね。少し暴走した感が否めないわ。ごめんなさい、早苗」

短所にも二種類ある。不幸にもその人の価値を下げてしまっている所、そしてもう一つはその人を表し、長所にもなり得る所。人はそれを、個性と呼ぶ。妥協を許さない蓮理の克己的な自己研鑽（けんさん）はもはや蓮理そのものを表すといっても良い長所であるが、一方で頑固者という短所が内在している。しかしそれは蓮理の価値を下げているのではない。長所の部分を目立たせる、個性なのだ。故に、人々は

蓮理のことを完璧だと疑わない。常に難しそうな顔をしているので、勘の良い人間なら頭固そうだ、とか怖そうな印象を持つかもしれないが、個性という意味での頑固者に気付くのは長年幼馴染みをやっている者しかいない。改善してしまう訳にはいかない。教えてやるのだ。自分はこんなにも素敵なんだぞ、と。

「謝ることないって。それよりさぁ」

突如、凄まじい音が二人の耳に届く。不幸を運ぶ音、とも取れるその音は快活に鳴る。音でわかる。言うまでも無い音。蓮理は音の発生源である早苗の腹にゆっくりと目を落とした。

「あら〜。こりゃあアレだね。お昼ご飯だね！　今日は蕎麦食べたい気分だよ、うん！」

ニヤつきながら、かつ目を輝かせながら早苗は蓮理に訴える。『腹減った。飯食わせろ』と。

「・・・少し早いけれど、行きましょうか。確か大通りにお蕎麦屋さん見掛けたから」

「よっしゃ行こう！　蓮理ちゃん速く！　めんつゆが私を待ってる！！」

蓮理の細く、雪のように白い腕―手首―を掴み一目散で大通りに向かって駆ける早苗。蓮理に合わせるつつもりは毛頭無いようだ。

「どうしてめんつゆなのよ・・・」

「んん？　なんか騒がしくない？　ってか人多いな～」

大通りに辿り着いた二人だったが、大通りの異変に気付いたようである。昨日も大概人で賑わっていたが、今日は少しばかり事情が違うようである。賑わいと言うよりざわめきと表現するに相応しいだろう。皆、目的地である蕎麦屋を取り囲むように見ている。

「すみません。あの、どうかしたんですか」

蓮理は大工の出立ちをした青年に状況を尋ねる。

「何でも、山賊達が縄張りの山から降りて来て、蕎麦屋にずっと居着いているらしいんだよ。腹減ったなぁ・・・」

青年は少し不安そうに答えた。それなら別の店に行けば良いと蓮理は返したかったが、あえて言わなかった。余程ここの蕎麦は美味しいのか、何か特別な理由があるのかは知らないが置いておいて、とにかく穏やかな雰囲気ではない。

「山賊ねぇ。私見るの初めてだけど、なんで今に限ってなのさ～」

愚痴を呟き始める早苗。それを慰めようと蓮理が口を開いた時だった。

「男は出て行けや！！」

店の扉が開き、店主と思われる初老の男性が転がされる。どうやら山賊の一人が蹴り飛ばしたようである。しかし、蓮理がもっとも注

目したのは顔や手に表れた、無数の痣。特に手が酷く、惨たらしかった。ここの蕎麦屋は提灯(ちょうちん)に書いてあるように手打ちである。つまり、手は蕎麦打ち職人にとって命であろう。店主は他の人達に運ばれながらも呻いていた。

「早苗、私も凄く空腹になってきたわ。それに、今とてもお蕎麦が食べたい。行きましょう。めんつゆが私達を待ってる。すみません通して下さい」

「わお、蓮理ちゃんもよーやく蕎麦の良さがわかってきたねぇ」

人を掻き分け、店先へと辿り着く二人。占拠ばかりか暴行まで犯す山賊を、蓮理が放って置く道理は無い。蓮理の脳内に響く、店主の呻き声。『娘が・・・娘がまだ・・・』

「誰か、早く同心へ通達を」

蓮理は観客と化している群衆へと呼び掛ける。先程話し掛けた男性が駆けて行くのを見て、扉に手を掛けた。

「あぁ？　何だぁ？」

扉を開ければ綺麗であったろう店の内装は、小汚い服装をした見るからに野蛮そうな男達によって埋め尽くされ、凄惨な目に遭っていた。蓮理は辺りを見渡す。女性客も混じっているのか、女性が四，五人山賊達が持つ御猪口(おちょこ)に酌を取らされていた。

「男は出て行け、何でしょう？　私達は女よ。入って来て良い筈だけれど？」

ああ、なんて汚らしいのだろう。成程、賊とはこういうものか。これは差別ではない。侮蔑だ。

「ふは、違いねぇ。別嬪さんがわざわざ来てくれるなんて思わなかったからよぉ。オラ！　こっち来て頭領に酒注げや！！」

そう言って山賊の一人は蓮理の肩を掴み、引き寄せようとした。

「触れるな外道」

しかし、それを蓮理が素直に認める筈が無い。掴んできた相手の手を逆に掴み返す。そして空いた手を襟首へと向かわせ、掴む。後は単純な流れ作業である。足を掛け、身体を捻り男を背負い投げる。勢い良く食卓に叩きつけられた男はその衝撃で気絶してしまった。

「おっ、アンタ運良いよ。蓮理ちゃんの一本背負いなんて、そうそう受けれるもんじゃないからね」

早苗の言葉の後、山賊達から笑いが消えていた。が、それも束の間であった。残った山賊達は怒るどころか気絶した仲間を笑い者にし始めたのだ。山賊達の態度に、蓮理の顔に怒りが表れる。仲間がやられて笑うとは本当に人間か、と疑いたくなる。

「貴方達・・・！」

「煩い。つーか蕎麦屋で酒飲むなよ阿呆共。酒臭いんだよ気持ち悪い。せっかくの香りが台無しだよ頭大丈夫か。あと、お前らも臭いせいでもあるな。死んでくれ」

蓮理が怒声を浴びせようとした、その時に蓮理達の横の食卓にて蕎

麦を平然と啜っている人物が口を開いた。蓮理も早苗も、山賊達でさえも今まで気付かなかったが、蓮理達にはその姿、その声には覚えがあった。

昨日出会った、赤髪の人物だった。

第四章　左見右見果賊物騒動（後書き）

＊巳
古時刻において午前九時～午前十一時を表す。巳二つは午前十時～午前十時三十分頃を指す。（古時刻は四つに分割されて言われていた。巳二つだと、巳の時間帯である午前九時～午前十一時を四つに分け、三十分を一つと数えた時の二番目）

＊同心
町村に必ず一部隊は置かれる、幕府公認の取り締まり役人。現実で言う、警察の役割を果たす。

＊食卓
テーブルのこと。

第5章　麗人変生龍如

蕎麦を啜る音が続く。続く。まだ続く。赤髪を揺らしながら蕎麦を食すその様は、つい先程発した言葉の主とは思えない程である。

「あ？」

やがて蓮理や早苗、山賊達の視線に気付き瞬く間に不機嫌そうなしかめっ面を見せた。

「何見てんだ。見せもんじゃねぇぞコラ。つーかこの姉ちゃん等ならまだしもテメェ等見てんじゃねぇよ鼻の穴に割り箸ブチ込むぞ」

間違いなく、二人に尋ねて来た人物である。着ている着物や声が同じであるし、何より目を引く髪型と小顔が証拠だ。相違点は、口調。昨日と共通している節はあるが、口の悪さが酷くなっている。そこの山賊とそう変わらない。

「あ、貴女・・・」

「わお、昨日の」

蓮理と早苗はほぼ同時に言葉を発した。それに気付き赤髪は二人を見る。そして首を傾げ、手を叩く。つまり忘れていたのであろう。自分から話しかけたこの二人のことを。

「ああ、その猫耳みてぇな髪で思い出した！　昨日のアレか！　嬢さん達か！」

「誰が猫耳よ」

蓮理はキッと睨みつける。昨日と全然雰囲気が違い、優美さが感じられない。まるで別人のようである。

「おいおい姉ちゃん達よぉ。勝手に話進めちゃいかんでしょ。俺達も混ぜてくれやぁ」

ようやく、山賊の一人が口を開く。赤髪の人物に気付かなかったことはどうでも良いらしく、むしろ美人と呼べる者が三人になり、酌注ぎが増えるのは山賊達にとって喜ばしいことである。

「そこのえらい別嬪さんもお二人さんも、気を取り直して飲もうや？　な？」

今度はやや大柄で無精髭の男が赤髪に近寄る。それはつまり蓮理達のにも近付いていることを意味する。それを蓮理が見逃す筈が無い。背を向ければ今度は蹴り飛ばしてやる。赤髪の女性には申し訳ないが、餌になってもらう。喰らい付くその寸前が貴様の最期だ。

「ぎゃあああああああ！！」

しかし、蓮理の思惑は外れる。自分はまだ足すら上げていない。では何故男は叫び、仰向けに倒れ、その上気絶までしているのか。全ては男の鼻が物語っていた。穴に割られていない割り箸が二本、それぞれ刺されていたのだ。

「な・・・」

刺したと思われる張本人は既に新しい割り箸を割り、残りの蕎麦を

一気に啜り上げている。そして、箸を叩きつけるように椀の上に置いた。立ち上がる。

「さて、鼻にブチ込まれた位で気絶してんじゃねぇよ。女はもっと太いもん突っ込まれんだからよ。別嬪てこの猫耳乳デカ釣り目お嬢さんと背の高〜い若干男らしいけど美人なお嬢さんのことか？　んん？」

「ななな・・・」

蓮理は紅潮せずにはいられなかった。確かに蓮理の乳房は平均よりずっと大きく、しかし括れは細いという体型である為、更により大きく見えてしまう。が、蓮理にとっては重い、有事によっては邪魔になる、極め付けに外来の下着であり現在の神州では普通となっているブラジャーの寸法が限られて最近はわざわざ発注せねばならない始末、挙句自分の好みに合う柄すらも限られてきてしまう。晒しで押さえ付けようにも息が苦しくなるだけで、効率重視の蓮理にはコンプレックスを抱いかざるを得ない。自身の猫耳のような髪型と同様に気にしていることを同性とはいえ率直に告げられ、加えて言った言葉の意味を理解してしまったのであれば赤面の一つや二つ、したくなってしまうだろう。

「ここにゃ、別嬪さんなんて二人しかいねぇって。俺が別嬪？　ふざけろよ」

倒れた男を揺さぶるのに飽いたのか、他の山賊達に問い始め、自ら近付いて行く。

「おいおい、謙遜すんなって。お前さんも負けない位の別嬪さんだぜぇ・・・へへ」

他と違い黙って酒を飲んでいた山賊の頭領はようやく自慢の口周りの髭を弄りながら開いた。気の強い男勝りな、しかし美しい女が自分に向かって歩み寄り、酌を注ぎに来たのだと思い込んでいるのであろう。事実、赤髪の手には徳利が在った。

「おい、別嬪、って意味知ってるか？　とりわけ美しい“女”って意味だ。よく見ろよ」

頭領の襟首をゆっくりと掴み、女の部分を強調しながら言った。顔を見て、頭領は固唾を飲んだ。昔見た、遠くからしか見ることができなかった名高い女郎、否、花魁と同等に美しい。もしくはそれ以上か。それほどまでの美人が目の前に立って、しかも引き寄せられ息が届く距離に居る。そして

頭領の意識はそこで途切れた。正確には途切れさせられたのだ。徳利を持つ赤髪の腕が頭領の頭蓋骨を叩き割らんと唸りを上げて振り下ろされたからである。その威力は凄まじいものであり、食卓も頭に与えられた勢いと固さに敗北し叩き割れた。

「うっわ酒臭！　誰が顔見ろっつったよ。あの姉ちゃん等にあって俺に無いもんがあるだろ。・・・乳ねぇだろうが！！　まず胸見るだろ普通！　貧乳でも少しは膨らみあるだろ！　よぉく見ろ絶っ壁じゃねぇか！！！」

そして明かされる。店内全員が驚愕し、疑わずにはいられない言葉

が炸裂する。

「俺ぁ、男だ！！！　この俺を女扱いしたド腐れ外道共ブッ殺す！！　テメェ等のもん踏み潰して使い物にならなくしてやらぁ！！」

第5章　麗人変生龍如（後書き）

＊花魁／女郎
吉原での上位の遊女のこと。かなり綺麗、かなりエロい、かなり身体良しの男の夢。／一般的な遊女のこと。こっちも色々と凄い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0547ba/

紅蓮天照烈士之神楽

2012年1月6日04時47分発行